

資料

山陽小野田市工業用水道事業の紹介

○事業の主旨

西瀬戸内海の周防灘に面した本市は、港湾条件に恵まれ、明治16年にセメント会社の操業開始後、石炭の生産等、古くから鉱工業地帯として発展してきた。そうした背景のもと近隣都市も含め、人口の集中と商工業のめざましい発展に伴い、次第に水不足に陥っていった。増大する水需要に対応するため、昭和15年から昭和24年にかけて県営ダムが建設された。その後も、昭和30年代半ばからは、石炭から石油へのエネルギー革命によって石炭産業の衰退があったものの、代わって重化学工業の発展により、大手企業が進出し、水需要は更に増大していった。

本市の工業用水事業はこのような背景のもとに、ダム建設をきっかけに実施された。

○事業の経緯

本市の工業用水道事業は、昭和24年の県営厚東川ダム（共同開発）の完成後、昭和25年に工業用原水供給申請を行い、昭和29年4月から化学工場1社に、同社が建設した送水管（昭和39年に水道局へ無償譲渡）によって5,500m³/日の供給を開始した。昭和33年の工業用水道事業法の施行後、昭和34年1月に自家用工業用水道事業として届け出した。

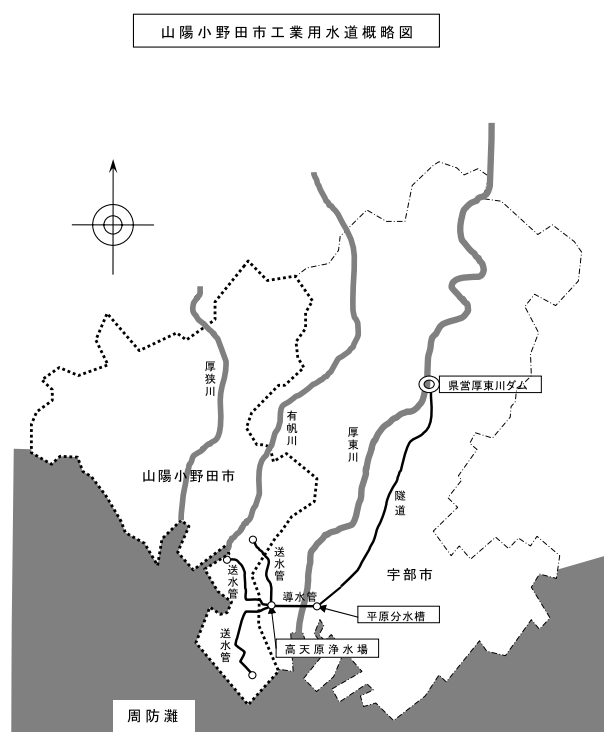
昭和37年には、新たに製薬会社が建設費全額負担により送水施設を建設。水道局が施設の無償譲渡を受け、昭和38年4月から14,400m³/日の供給を開始した。昭和39年には化学工場が当初の5,500m³/日から10,300m³/日とし、工業用水供給量の合計は24,700m³/日となった。

昭和43年7月には、石油精製会社が同じく建設費全額負担により送水施設を建設。水道局が施設の無償譲渡を受け、同年8月から4,800m³/日の供給を開始した。これにより本市の工業用水道事業は、給水件数3社、供給量合計29,500m³/日となったが、昭和59年3月と昭和60年3月に企業の生産調整に伴い供給量を減量したため、供給量合計24,700m³/日となった。また平成7年8月には、自家用工業用水道事業から工業用水道事業として届出変更し、現在に至っている。

本市の工業用水道施設は、最も古いもので51年、新しいもので37年経過しており老朽化が進んでいる。

これまでの間、漏水多発箇所における布設替えや、下水工事に伴う移設、道路改良等で全体の15%程度改修しているが、大部分が布設当時の状態であり全般的な施設改良が今後の課題となっている。

○給水区域図



○ユーザーの概要

(平成18年3月末現在)

業 種	給水件数	契約水量 (m ³ /日)
化学	2	19,000
石油	1	4,800
合計	3	24,700

○工業用水道施設の概要

県営厚東川ダムを水源とし、総延長約12.8kmの隧道にて分水槽まで自流させ、そこから本市の導水管（約3.5km）にて浄水場に導水し、ポンプにて3社へそれぞれの送水管によって供給している。

送水管については径300mmから径450mmで布設総延長は約11.6kmである。

○事業の特徴

昭和59年と昭和60年に合わせて4,800m³/日の送水量の減量があったが、それ以降約20年間は現在の送水量を維持し、健全経営を行っている。

また、本市の条例上の計画1日最大給水量は過去最

大供給時の29,500m³/日であり、現在供給量に対して4,800m³/日の余力を持っている。

○山陽小野田市水道局のホームページアドレス

<http://www.city.sanyo-onoda.lg.jp/suidou/index.htm>